あなたが生き抜いてくれたおかげで、
私は生まれ、この文章を記すことができた。
大好きなあなたに、私は出会うことができた。

鈴木あき/回想録

# 生き延びて

## ［前編］壮絶な戦争体験

２０２０年７月30日、終戦から75年になるこの年に、
鈴木あきは命の灯を消した。
大正、昭和、平成、令和の４時代を生き抜き、悲惨な戦争を、
努力と忍耐で乗り切った強い女性だった。
看護師として患者を助け、養護教諭として子どもたちを助け、
姉として弟妹を助け、そして私たち家族を支えた人生。
壮絶な体験をしながら命を繋いできた証を
書き留めておくことがせめてもの務めだと思い、
記録を残すことにした。

この文章は生前、あきの娘である昌子が本人から聞いた話を、孫である航が再調査し、歴史を辿ったもの。かなり精緻な記憶であったことから当時の状況、そして具体的な場所なども調べることができた。改めてその記憶力に驚くばかりである。

98年生き抜いた鈴木あきの姿、歴史を、娘と孫が紐解いていく。

さて。第一次世界大戦終結から4年後の１９２２(大正11)年８月10日、山形県西村山郡宮宿町(現在の朝日町宮宿)に、柴田あきは柴田武雄・きよゑの四女としてこの世に生を受けた。梅雨も明け、この日の天気は晴れ。最高気温は30℃を超える、８月半ばらしいとても暑い日だった。

１９３７(昭和12)年３月に宮宿尋常高等科を卒業する。今でいうと中学３年生、満15歳にあたる。当時大阪で働いていた姉のきよを頼りに、大阪府岸和田市にあった学校法人・実践女学校に入学することとなった。当時の大阪は東京以上に発展しており、商工業の中心地。15歳でこの地に降り立ち、働きながらも学ぶことのできた実践女学校(家政科)で研鑽を積み始めた。この年の夏に盧溝橋事件が発生し、日中戦争が開戦する。自身も戦火に巻き込まれることになるとは、夢にも思わなかっただろう。

本科を３年で終了し、１９４０(昭和15)年３月卒業。当時大阪に住んでいたイトコの紹介で、大阪市住吉区にある熊谷博士の家に住み込み、看護婦の見習いを始めることとなった。今の阿倍野区。あべのハルカスなど近代的な建物が並ぶその街で、あきの『社会人生活』は始まった。



実家が朝日町新宿という熊谷博士は当時、伝染病に関しては東洋一と称されるほどの名医。調べてみると当時の大阪市南部には名医が集っていたようだから、相当腕の立つ医者だったのは間違いない。昼間は伝染病の専門医として、夜間は内科医として患者を診ていた。

見習いを始めて２年後の１９４２(昭和17年)年、大阪南区塩町通に存在した原田産婆看護学校看護科に入学。現在中央区南船場として名を残すこの街は、すぐそこに食いだおれ人形や道頓堀があり、大阪のメインストリートとして知られる心斎橋付近である。毎日16時まで授業を受け、18～21時の３時間は熊谷院長のもとで内科の実習を受ける、これが１年続くことになる。

熊谷院長の妻は新庄市の出身。当時結核を患っていたため、別の場所に住んでいたのだが、その住まいに行って世話をすることもあった。彼女の具合が非常に悪い時は派出看護をする看護婦が寝泊まりしており、当時のあきは学業と両立しながら昼間の看護を担当していた。

原田産婆看護学校を１年で卒業した後、あきは大阪府と和歌山県両県主催の看護婦検定を受け、両県ともに合格。看護婦としての免許を下付される。１９４３(昭和18)年当時も看護婦の需要は高く、技術面でのスキルアップを考えた時、現状に疑問を抱き始めたあき。

そんな時、朝日町和合の床屋の娘さんで、同じく大阪に看護婦として働きに来ていた同級生の貞神

さんから、仲間内で集まろうという話があった。元町の海野さん、和合の魚屋の娘(名前は忘れてしまったが、立木に嫁ぎ、その後神奈川に移住したと記憶する)の4人で会うことになった。

4人は将来について語り合った。その後、貞神さんから一通の手紙を受け取る。〝私は山形に戻らなければならない。私の代わりに看護師として働かないか?〟そんな内容であった。

この手紙をきっかけに、熊谷医院を辞めることを決意。当時は〝お礼奉公〟的な形で勤めることが常だった時代だ。熊谷院長からものすごく怒られた。しかも両親が熊谷院長の下で勤めさせてもらうことをお願いした経緯もあったこと、奥さんの世話をするのは山形出身の人間という、今ではよく分からない決まり事があったようで、とにかく怒られた。

あきは産婆になるのが嫌だったのだ。熊谷医院では産婆の学校に通いながら働くのが普通だったが、産婆を嫌がり、看護学校に通ったことで他の分野に目が向いた。産婆になるためだけの勉強をしていたら、そのまま熊谷医院で看護婦をするしか道はない。熊谷院長の「辞めさせられない」という言葉を聞かず、逃げるように医院を飛び出し、泣きながら貞神さんを訪ねた。柴田あき、21歳の出来事だった。

まもなく、貞神さんが当時働いていた大阪市医療法人公堂会病院に看護婦として勤めることになり、しばらくして彼女は和合の実家へ帰っていった。余談ながら、なんとこの病院は場所を変えて今も存続しているようだ。



この病院では看護婦免許、産婆免許、どちらの免許も取得することが義務付けられていた。あきは産婆の免許を持っていなかったため、病院側から受験するように言われていた。嫌々ながらに講習を受ける日々が続いた。毎日、午後から産婆の講習。週に一度は華道と書道が必須科目。ある日、産婆講習の中でお産に立ち会う実習があった。取り上げるまでは見学。生まれてきた新生児をそれぞれが産湯で洗うのが役目だったのだが、新生児がヌルヌルしていたため、赤ちゃんを誤って浴槽に落としてしまった。驚きに加え、医師、看護婦から怒られてしまったことで、それ以来、産婆としての自信ややる気を全て失ってしまう。これも余談だが、後に娘の昌子を授かり、退院して家に戻った後、小さな娘の体を洗う時もその時の苦い経験が頭をよぎってできなかったそうだ。

結局、産婆免許の受験は、受験手続きを完了し、受験料も支払ったにもかかわらず、試験前日に仮病を使ってキャンセルしてしまう。病院側から、秋に行われる次回の試験を受けるよう説得される。加えて眼科の看護婦主任が辞めたことから、眼科の主任も命じられた。自信がなかったあきはこれが嫌で嫌で仕方ない。断り続けたものの、ともに入った他の2人は看護婦免許を持っていなかったため、どうしても免許を持つあきが主任にならざるを得なかった。

主任の仕事に、医者のカルテを見ながら傍で薬の処方箋を書くという作業があった。大阪に出てきてからインクを付けながらペンで書くなどしたこともなかったあきは困ってしまい、何度も怒られていた。

しかしその後養護教諭になった際、薬を付けながら目洗いを担当することも多く、眼科での経験が役に立つことになる。人生とはどこでどの経験が役立つか分からないものだ。

前述の産婆の資格試験が間近に迫る１９４３(昭和18)年７月。あきは「大日本赤十字社大阪支部」の試験を受けることを決意。公堂会病院から受験した第一号となる。受かれば産婆免許の受験を逃れられるという、今考えると安易な理由とも思える決断があきの人生を大きく変えていくとは、あき自身一切思っていなかっただろう。

赤十字病院の看護婦となれば、今でいうところのエリートだ。合格したはいいものの、公堂会病院からまた怒られてしまう。病院側からの「辞めさせられない」という言葉を聞かず、熊谷医院の時のように辞めてしまったため、病院に残してきた荷物は、当時大阪に住んでいた四ノ沢の姉の夫の親戚に取りに行ってもらうことにした。もう少し計画性を持って行動してほしいというのが孫の意見だが、それだけその環境が嫌だったのだろう。

１９４３年といえば太平洋戦争は更に激しさを増し、学徒出陣の始まった年。とはいえ、大阪の一病院勤務のあきには、戦争の火の粉が飛んでくることなど考えられるはずもなかった。大日本赤十字社に入社する者は寮に住み込み、赤十字精神を叩き込まれながら、訓練が始まった。



担架を運んだり、食事もロクに取れない状況を想定した辛く、厳しい訓練。赤十字社の看護婦になるということは、戦場に行くことを覚悟しなければならない。看護婦の中で最も位が高い人は『監督』と呼ばれ、東京と大阪の赤十字病院に一人ずつ、全国に２人しかいなかったのだが、この監督たちから厳しい教育訓練を受ける。戦時中でもあることから、昼食は塩をつけたじゃがいも１個とか、さつまいも１切れ、ソーメンを少々という実に粗末なものだった。

白衣も着ずにブルマーのような長いパンツを履いて訓練を受けるのだが、次第にブルマーも支給されない時代になり、もんぺを履いての訓練が続く。病院の庭にある池に橋をかけ、４人で担架を持って渡ったりする訓練もあり、あきは滑って池に落ちてしまい、つられて他の３人も池の中へ落ちてしまったこともある。ドジだったあきは怒

られてばかりの日々を送っていた。

「こんなところに来るんじゃなかった」

そう、何度も思った。

ある時、パーマをかけていったら「生徒でありながらパーマをかけるとは何事か！」と、また怒られたという。あくまで孫の意見だが、これは祖母も悪い。その光景が容易に想像できる。いろいろなことをしでかすので目立つタイプではあったようだ。

日本は次第に物のない厳しい時代に入っていく。そして、運命の時が訪れる。

１９４３(昭和18)年12月。学徒出陣第一陣が始まった頃、あきに臨時召集がかかった。吹田市にある大阪赤十字社阿倍野病院に同僚たちと異動になり、寄宿舎生活を送る。この時、召集令状は実家に届くことになっていたため、驚いた両親から「召集令状が来た」と電報が届いた。

本来、異動になって3か月が過ぎれば実家への帰宅が許される。しかし翌１９４４(昭和19)年１月、「今度は本召集が来た」と実家から連絡が入る。赤十字社の大阪支部に問うと、貝塚の陸軍病院に異動するように言われたが、「現在阿倍野病院にいる」と伝えると「それならそのままいてくれ」と言われ、この話は取り消されることとなった。勤務中のある日、ニューギニアや南方、そして満州から引き揚げてきた患者である兵士に「看護婦さん、内地勤務がいいよ。行ったら死ぬよ」と言われる。戦争は確実に、あきの身近に迫っていた。

それから1か月後、再び実家に『本召集』の連絡が行く。また大阪支部に問い合わせると、今回は間違いなく本召集だった。それも外地。フィリピン島派遣看護婦に選ばれたのだ。「断ることはできない」そう言われた。

「私は3年も家に帰っていないので、一度帰らせてください」あきは頼んだ。

「実家はどこだ？」と上官が問う。

「山形です」



「山形に行って2～3日で帰って来れると思っているのか？行くだけで何時間かかると思っている？」

「一晩泊まって戻ってきます。4日間で帰ってきます。用事があるんです」

あきは何度も何度も食い下がり、実家への帰宅を願い出た。しかし何を言っても聞き入れてもらえるはずがなかった。ついに院長から呼ばれてしまう。院長に呼ばれるということはよほどのこと。ドキドキしながら院長室へ向かうと、「帰らなければならない程の用事があるなら親を呼びなさい」そう言われた。

「親は来ることができません」必死の思いで気持ちを伝えたが、「親、兄弟がいたと思うな！赤十字精神を叩き直さなければならないのか！」と取り合ってもらえなかった。精神論が中心と

なっていた時代だ。夫がいようと子どもがいようと命令には従わなくてはならない。結局、あきは山形に戻ることはできなかった。

召集の命を受けた翌日。同じく召集がかかった人間は一か所に集められ、スパイ行為を防ぐため、その後の行動は一切秘密にされた。赤十字阿倍野病院から召集を受けたのは母一人。救護班は11人いた。黒い服を着て汽車に乗せられ、ある場所に集められた。今、思い返してみると旅館のようなところだったかもしれない。

このくだりを見た孫は過去の文献などをあたってみたのだが、日本赤十字社の従軍看護婦はほぼ同じような状況だったようだ。一か所に集められると、その後ブラインドが下ろされた汽車に乗せられ、どこかも分からない場所を経由しながら、広島や下関の港から船で満州、南方へ送られたという。

日本赤十字社によると、日中戦争が始まった１９３７(昭和12)年７月から、太平洋戦争終戦まで、９５４の救護班が戦地に派遣された。そのうち外地は３０７の班、病院船に91の班で、他は内地。外地は満州64、中国大陸１８７、南方56の班で、内外地あわせて延べ３万５７５９人の看護婦が任務についた。そのなかには何度も召集を受けた人もいるため、実人員は２万６５３５人で、そのうち外地は１万２５２５人。医師らを含め、命を落としたのは１１８７人。このうち看護婦は１１２０人にものぼり、外地で終戦を迎えた看護婦は約５０００人とされている。



話を戻す。フィリピン島まで行くにも、肝心の船が準備されておらず、1週間から10日待機することになった。その間、現地で伝染病にかからないように予防接種や健康診断が行われた。1度ではなく、1日おきに繰り返し続けられた。また、住吉神社に行って祈祷してもらったり。大阪で3～4日滞在している間は、近くに実家がある人は家に戻ることもできた。行けないのはあきを含め、2人だけだった。

１９４４(昭和19)年5月末。有名なノルマンディー上陸作戦が行われようとしているなど、時は戦争真っただ中。大阪に滞在して4日後、大阪駅から汽車に乗り、あきは広島へ向かった。広島の宇品港から船に乗ってフィリピンへ向かうのが当時のルートであったのだが、この行程は本人たちに全く知らされてはいなかった。フィリピンのどこに行くのかも教えられることはなかった。

それこそ荷物同様の扱いである。支給された着替え、履物、上着などを手に、7時間ほどかけて広島に到着した。着くと、また数日待たされた。厳島神社に祈願に行き、「こんなに若いのに松島と厳島、日本三景の2か所もおまいりしてしまった」と思った。「諦めがついたね」と、同僚と口々に言い合う。「写真を撮ろう」ということになり、支給された黒い服を脱ぎ捨てて夏の制服に着替え、写真館で写真を撮ってもらった。送料を払って住所も教えたが、のちに実家に戻ってみると写真は届いていなかった。

いよいよ、広島からフィリピンへ出発する日がやってきた。赤十字精神の表れか、誰一人愚痴をこぼす人はいなかった。

「あの船に乗るんだって」
「あんな船でフィリピンまで行けるんだろうか」
「バシー海峡でやられてしまうかも」

同僚たちと口々に言い合った、その船の名は立花丸。小さい船のため、米軍から空襲を受けても小回りがきく。今の広島港である旧宇品港を出港し、夜に瀬戸内海を渡って下関へ。瀬戸内海は危険もなく、船内では歌ったり笑ったり、それは賑やかだった。21歳初夏。あきを、過酷な1年が待ち受けていた。

下関を経由し、門司港に着いた時には〝戦争〟がみんなの頭をよぎり、誰一人として笑う人間はいなくなった。燃料給油のため門司港に待機し、その後鹿児島の港へ。具体的な地名は出てこなかったが、調べた結果、鹿児島港であることはほぼ間違いない。

鹿児島港でも給油待機があったのだが、そもそも航路は一切教えられないことになっていたので、どこをどう通ってきたかは分からない。船に揺られ、3日目に台北へ到着。鹿児島からだったか、台北からだったか記憶は定かではないが、白い病衣を着た兵士たちが大勢この船に乗ってきた。本当は元気な兵士たちなのだが、病院船のため病人の格好をしていたのだった。もちろん、あきたちも看護婦の制服を着ていなければならない。



当時、国際法で病院船は攻撃してはならない、というものが存在した。病院船は敵国に通告され、これを沈めてはならないと定められていたのだが、時は太平洋戦争末期。病院船に兵士を隠して輸送する行為は連合国側にも筒抜けだった。もはや事前通告も無視され、度々撃沈させられた。多くの病院船、そして兵士、看護婦が今も海の底に眠っている。

台北に着く頃には船酔いの同僚が多く出て、あきもその1人だった。非常に潮の流れの速い海域である。仕方のない話だ。わずかに元気のある数人は船を降り、現地で半径1mもある大きなカゴに、干しバナナや白砂糖をどっさり買い込んできた。台湾では日本のお金が使えたので、手持ちのわずかなお金で買ったと思う。

日本では見たことのないような食べ物に一同驚き、「空襲受けて沈没して、これだけの砂糖が海の中に入ったら水も甘くなるね」等と冗談も飛んだ。まだ、冗談の言える状況だった。

以下余談。台湾より先、フィリピンでは日本の通貨が使用できない。ここでは軍票（日本で発行したこの時だけのお金）を使用した。あきは軍票を通帳に入れていた。当時の郵便局の通帳は屏風畳みで、郵便局は日本の軍隊が担っていた。フィリピンへ日本から給料が振り込まれる。食べるものや日用品は軍からの支給なので、特にお金を使うこともない。空襲が少ない初めの頃は、フィリピンの街に行ってビーフンを食べたりすることもあったという。

給料は日本にいたときの倍。書記担当の男性が通帳に記帳しにいってくれる。街に行く時は必ず数人の兵士が付いてきてくれる。給料は下士官(軍曹、伍長)と同額。しかしその後、行軍していると軍票は必要なくなり、ちり紙の代わりに使っている人間もいた。

話を戻そう。台北にて、朝鮮から、赤十字看護婦「朝鮮班」も乗ってきた。いかにも朝鮮人らしい一人が「なぜ内地の人と一緒に戦地に行かなくてはならないのかわからない」と言っていた。当時、朝鮮は日本の領土だった。

台北から船でフィリピン・マニラに向かう時は、バシー海峡を通過する必要がある。バシー海峡とは台湾の南端からフィリピン・ルソン島の北端まで、約４００㎞近くに渡って続く海峡のこと。現在でも海運の要衝として知られ、シンガポールなどからの船は必ずこのバシー海峡を経由して日本へ向かう。

戦時中も同様で、『日本の生命線』とも言われていた海峡だ。もちろんアメリカ側も熟知しており、潜水艦による魚雷で、多くの日本の輸送船が撃沈された。『輸送船の墓場』とまで言われたこの場所で、10万人以上が亡くなったという記録もある。

「大抵バシー海峡でやられる」と、日本人の患者(兵士)たちが言っていた通り、バシー海峡で空襲警



報が出た。海で育った1人以外はものすごい船酔い状態。夜間、警報が鳴り響き、救命胴衣を身に付けていると警報から空襲に変わり、船内は真っ黒になる。敵の飛行機に場所を知られないためだ。船内の誰もが「ここで終わりか…」そう思いながら、船酔いも辛く「もうどうでもいい」という投げやり状態になっていたという。船が傾くたびに襲ってくる吐き気。同じ船に乗っていた将校は「気を張っていないからだ」と怒鳴り散らす。まさに命がけの渡航、そう言っていいだろう。

広島を出てから1週間、何とかフィリピンのマニラ港に着いた。マニラは穏やかな天気だったことをあきは覚えている。昨夜のバシー海峡上の空襲がまるで嘘のようだった。マニラの街中は、どこに行っても銃を持った日本兵が立っていた。「日本人に生まれて良かった。日本兵がどこもかしこもいるんだから日本って凄い」そう思った。

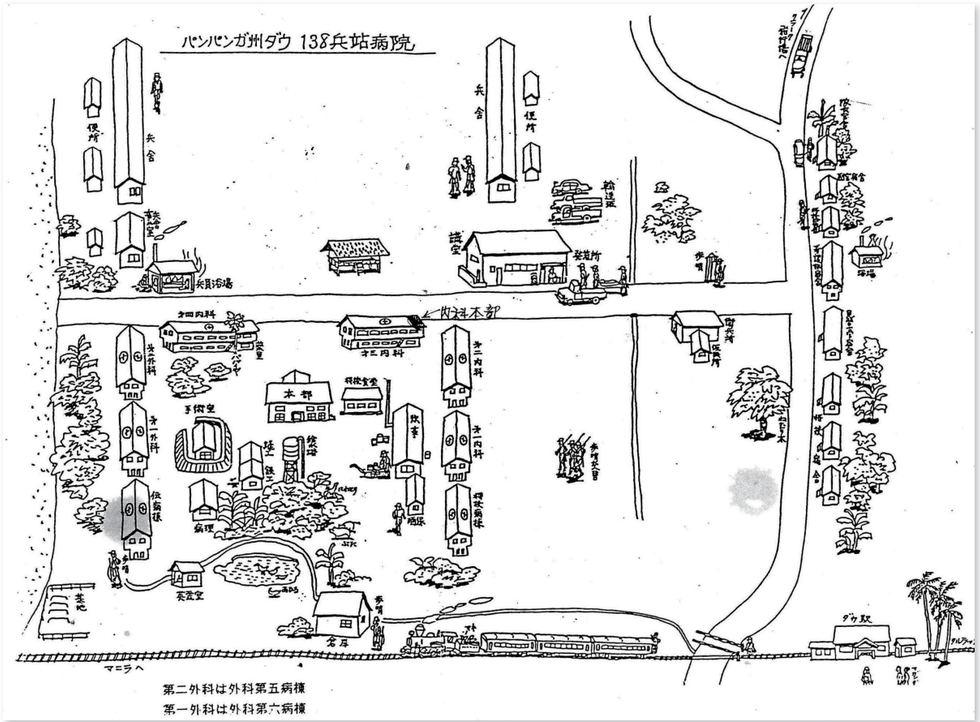
さて、マニラ港に着いても、輸送トラックがチャーターできなければ動きようがない。旅館に大人数で宿泊するわけにもいかず、船の中で自分が行くところの汽車やトラックが来るまで待つ。はたして３日間くらいは待っていただろうか。

マニラ港から汽車とトラックで移動することになったが、トラックで行けば1時間くらいのところ、汽車だと6時間ほどかかったのではないだろうか。とにかく遅かった記憶があきにはある。車内には現地の人間も乗っていた。マニラは当時、大阪では見られないような都会の装いで、コンクリートの建物と英

英文字の看板に異国を感じたものだ。

あきが配属されたのは第１３８兵站病院（へいたんびょういん）。兵站病院は陸軍病院よりも設備などがない。それでいて容態の重い患者が入院している。さらに設備がなく、重傷者が入院している野戦病院と区別がつかないほどの病院だった。ケガをすればすぐに野戦病院に行き、兵站病院に送られる。兵站病院はバラック建てで、空襲を受けたらひとたまりもない。日本兵が占領した現地の病院はもう少しまともな建物だったが、そう数は多くなかった。

マニラから北へ１００ｋｍほどのところにクラーク飛行場がある。その近くにあるダウという街に第１３８兵站病院はあった。当初は外科で、弾が当たったりした兵士の介護をはとク




[第138兵站病院の構成]
病棟…内科(本部、1～4病棟)、外科病棟(本部、外科5～6病棟)、病棟、将校病棟、病理試験室、歯科、外来係、婦人科健診
本部…功績係、発着係、経理、手紙検閲係、電気・水道係、営繕係、磨工・縫工室、経理、車両係、炊事係、兵舎係、薬剤



行っていたが、グループ長である増田正枝婦長が伝染病の知識に長けている人だったため、あきも伝染病棟を担当することになった。赤痢や腸チフスの患者が運ばれる伝染病棟の看護婦は10人に満たず、水が豊富にあるわけでもないので、患者のトイレには真っ白な石灰を掛ける程度で対応するなど、それはそれは粗末な設備だった。

夜に病棟を回ると、兵士たちに「看護婦さん、ありがとう」と声をかけられる。その言葉に「この兵士はもう持たないな」と直感する。次の日には死亡したその兵士たちがトラックで運ばれていく。そんな日が毎日続いた。

粗末な設備に南国らしいスコール。過酷な環境での任務の心の拠り所は〝国のため、国に尽くす〟というもの。愚痴を言ってはいけないと教育されてきたから、ただただ、そう思うしかなかった。ダウでは暑い日が続き、水はないので、スコールの水をバケツにとっておく。その水で洗濯物を濡らし、配給の固形洗濯石鹸を使って洗濯する。石鹸が付いたまま部屋のまわりの草原に干しておくと、昼のスコールできれいになる。